

第6章 五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産

廣瀬 覚

はじめに

待望の五色塚古墳の埴輪がここに公表されるに至った。前期後葉としては大王墳に匹敵する規模（墳長194m）を誇る五色塚古墳からは、当該期の埴輪様式を象徴する鰐付円筒埴輪が大量に出土していることが早くから周知されており、その背景には王權中権との密接な関わりが推察されてきた。今回、墳丘において原位置を保って出土したものを中心に実に300個体を超える埴輪が図化・公表されたわけであるが、埴輪研究にとってそのことの意義は極めて大きい。なぜなら陵墓に治定されている巨人大古墳の面的な調査がまず不可能な状況にある中で、後にも先にも五色塚古墳出土埴輪は大王墳クラスの埴輪生産の実像を推し量ができるほぼ唯一の資料と言っても過言ではないからだ。また、全形の判明する資料が多数存在する五色塚古墳出土の埴輪群は、前期後葉から中期初頭にかけての埴輪編年を再整備する上でも重要な鍵を握る。

ここでは、まず五色塚古墳出土埴輪の基本的な特徴を確認しつつ、当古墳の生産組織の復原を念頭においていたやや詳細な分析に取り組む。さらにその成果を踏まえつつ、周辺古墳や他地域における関連する埴輪群との対比を通して五色塚古墳出土埴輪の時間的・空間的位置づけを図ることで、五色塚古墳築造の歴史的・社会的背景に迫ることにしたい。

1. 五色塚古墳出土埴輪の特徴

五色塚古墳の墳丘各所から出土した埴輪はその9割以上が鰐付円筒埴輪からなる。鰐をもたないものも存在するが、それらも全体的な形態は鰐付のものと大差がない。

突帯間隔は17.5cm、底部高は35cm前後を測るもののが大半で、突帯間隔のはば2倍で底部高を割り付けることを特徴とする。段構成は5条6段のものと4条5段のものとがある。以下、5段のものを大型品、4段のものを小型品と呼ぶことにすると、大型品は3段目と5段目に、小型品は2段目と4段目に透孔を2孔配置する原則が認められる。したがって、2段目までが残存すれば透孔の有無によって大型品か小型品かの識別がつく。

口縁部高は小型品が9.5~23.5cmと様々であるのに対し、大型品は10cm以下に揃えられている。なお、朝顔形埴輪の多くは最上段の突帯間隔が狭いこの時期に通有の形態をとるが、今回、図化された朝顔形埴輪の中には確実に大型品と判断できるものはなかった。しかし、後述するように五色塚古墳との関連が深い舞子浜遺跡出土の埴輪棺群の中には大型品の朝顔形埴輪が含まれる。よって、五色塚古墳の朝顔形埴輪にも本米、大型品・小型品の両者が存在するものとみてよい。

鰐は大型品、小型品ともに下端を1条目突帯に揃え、上端を普通円筒埴輪は最上段突帯に、朝顔形埴輪は上から2条目の突帯に揃えて接合する。この時期の鰐付円筒埴輪は一般的に口縁端部に鰐上端を揃えるものが多いが、五色塚古墳の場合、普通円筒埴輪・朝顔形

埴輪とともに鰐上端が通常よりも一段低く接合される点に特徴がある。また、朝顔形埴輪であるWくⅢ30(76)には、鰐の周囲に線刻による縁取りがみられる。他古墳では東大寺山古墳において同様に鰐の周囲に線刻をもつ朝顔形埴輪が存在することがよく知られている（置田1977）。

製作技法についてまず留意しておきたいのは、突帯間隔設定技法についてである。先述のように五色塚古墳では底部高・突帯間隔が全体的によく揃う。そうした規格性を実現しているのが突帯間隔設定技法（辻川1998）であるが、当古墳の場合、四線・刺突・ヨコナデの異なる3種の手法が用いられている。逆に言えばこうした手法の差を越えて、底部高・突帯間隔は全体的によく規格化されていると言える。その他に注目すべき技法としては、幅広の粘土板を用いて基部成形がなされる点があげられる。第1段の半分ほどを基部とするものが多く、こうしたあたりは底部高が著しく高い当該期の円筒埴輪に一般的である。外面調整は一部に連続的なヨコハケを施すものもあるが、多くの個体がタテハケを最終調整とする。段間に1ストロークで埋めるものが多いが、それらも一次調整として施されるものがほとんどである。鰐の接合手法には、「縦線」「V字」「斜格子」「刺突」などのバラエティがある。

なお、口縁部には9種類以上のヘラ記号ないしは竹管によるスタンプ・円孔等が施される。原位置出土のものでこうした記号ないしは施文が確認できる個体は全体の1割程度にとどまる。しかしながら、口縁部が全周にわたって残存するものがそう多くはないことを考慮すると、本來はほとんどの個体において施されるものであった可能性も十分想定される。また、ごく少数ではあるが底部に円形のヘラ書きを乱雑に施すものがある。

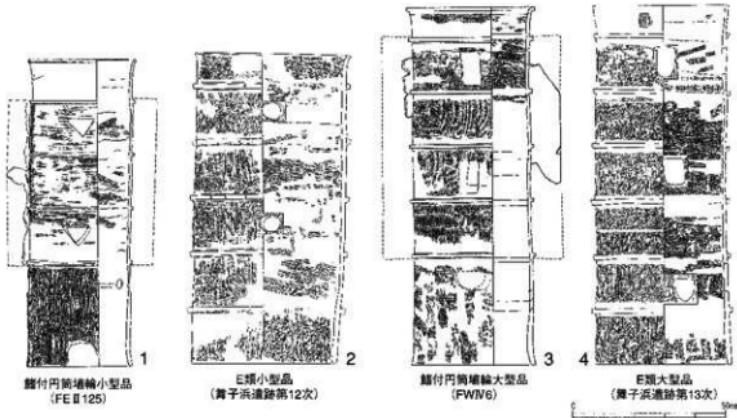


図6-1 鰐付円筒埴輪とE類の段構成の対応

以上のような鰐付円筒埴輪を中心とする埴丘出土の埴輪群の他に、外堤から2個体それらとはやや特徴を異にする円筒埴輪が出土している。報告でE類とされたもので、埴丘出土の埴輪と異なる点は、底部高を突帯間隔と等しく割付ける点、鰐を持たない点、透孔を1段中に4孔配置する点である。この2個体からは全形を窺うことはできないが、やはり

舞子浜遺跡出土の埴輪群の中にE類と同種とみられる全形が判明する埴輪が含まれており、それらを通して五色塚古墳の一般的な埴輪との比較が可能である(図6-1)。すなわちE類にも、5条6段のものと6条7段のものとがあり、両者の器高はそれぞれ墳丘出土の小型品、大型品にはほぼ対応することがわかる。突帯間隔も墳丘出土のものとほぼ同一であることから、E類の1条目突帯を省いた姿が墳丘出土の埴輪のあり方にほぼ一致することになる。透孔も1段中2孔となるものもあり、II縁部高も先に見た墳丘出土埴輪のあり方に対応するとみられることから、E類も墳丘出土の埴輪と同じ集団によって生産されたものと理解できる。底部高の割付や鱗の有無などが両者の決定的な相違であり、樹立場所も墳丘の内外で異なることからすると、両者は意識的に作り分けられたものである可能性が高い。

なお器財埴輪については、盾形埴輪の破片と蓋形埴輪が出土している。盾形埴輪には、平行線と綾杉文による区画を鋸歯文で充填するものと、外周ないし内部の区画に突帯を用いるものとが確認できる。後者は鋸歯文あるいは菱形文とみられる線刻が残るものもあるが、全体としては無文の区画を含むような簡素な盾となるものと推測される。蓋形埴輪には、笠部に複合鋸歯文を施すものと、まったく施文をもたないものとがある。前者は笠部下半が残存するのみであるが、先端が段差をともなって屈曲する。後者は笠部の中央と先端に突帯を有し、軸受部は朝顔形埴輪の頸部のように外反する。台部は中央で大きく外反・屈曲して笠部に取り付く。なお小壺古墳からは、家形埴輪や駒形埴輪とみられる破片が出土している。

2. 五色塚古墳の埴輪生産組織像

報告では、墳丘出土の円筒埴輪が胴部と最下段の透孔の形状とその組み合わせによって、AI、AII、AIII、AV、AV、AVI、BI、BII、BIV、BV、CI、CV、DIの13類型に大別されている。全形が判明する資料が多数得られていることにも支えられて、実に多様な透孔の配置パターンが存在することが明らかになったと言える。透孔の形状や配置は完成した埴輪の視覚性において非常に大きな位置を占めることから、製作工人の意志をそれぞれ反映しているものと推測される。したがって、以下ではこうした透孔配置にみる大別単位がT人編成上の一定のまとまりを捉えているものと仮定して検討を進めるにすることにする。

ところで先にも指摘したように、当古墳の円筒埴輪の場合、大型品は口縁部高が10cmを上回るもののがなく短く規格されているのに対し、小型品の口縁部高は長短さまざま同一の透孔配置をとるものにおいてもバラツキがみられる。逆に言えば、そうした口縁部高の差異に着目することで、上述の大別単位はより小さな型式的なまとまりへと細別することが可能である。報告では統計的な処理に基づいてa:8.5cm以下(大型品のみ存在)、b:9.0~10.5cm、c:11.0~14.0cm、d:14.5~18.5cm、e:19.0cm以上の5種に口縁部高が分類されている。したがって小型品の細別単位を示す際には、上述の透孔配置に基づく類型表記に口縁部高を示す小文字のアルファベットb~eを組み合わせて表記することにする。また、口縁部高はほぼ同様であっても、底部の小孔の有無などその他に明確な差異を認めうるものについてはさらなる細分を行った。

表6-1には数量的ないしは内容的に安定している11の類型を提示した。このうち、AV類は舞子浜遺跡出土埴輪も含めて全体で4個体と出土数が少ないが、それにもかかわらず3個体が朝顔形埴輪となることが確実であるので、大別単位そのものをまとまるある単位

とみなしてAIV(F)類として提示した。またCIL類とDIL類は、それぞれCI類、DI類の大型品であり、口縁部高が短く揃えられているため細別が困難であるが、後の議論の際に重要なため括して提示しておいた。

ところで、表6-1では各細別単位ごとに確認できるヘラ記号を付記しておいた。表をみても明らかのように、各細別単位内に複数のヘラ記号が確認される事例は今のところ見あたらず、むしろ数量的に豊富な類型では特定のヘラ記号が集中する傾向が認められる点は重要である。五色塚古墳出土埴輪の場合、ヘラ記号は口縁部を基本として描かれるが、口縁部は最も残存率が低い部分であり、ヘラ記号の有無すら明確にできない個体が多い。それにもかかわらず、各細別単位ごとに特定のヘラ記号の集中が認められる点は、口縁部高に基づいた小型品の細別の有効性を傍証するものと言えよう。

このように五色塚古墳出土埴輪からは、小型品を中心に非常にまとまりある細別単位を抽出することができる。問題はこうした細別単位が具体的にどのような実体を捉えているかである。すなわち、これを特定の工人個人による製品群とみるのか、それとも一定数の工人からなる小グループによる製品群とみるのである。五色塚古墳の埴輪生産組織の理解は

細別 単位	法量			その他の特徴	ヘラ記号 記号	筆記数	主な該当資料
	口縁部高	突き同耐	底部高				
AIC(b)	10.0~12.0cm	18.0~19.0cm	34.5~35.5cm	4段目の三角通孔は上向きが多い。口縁部は板やぐい板。	山形	6	1(FEB59), 16(FEI139), 21(FEI143), 21(FEI150), 舞子浜第12次東側棺身
AID	14.0~18.0cm	17.0~18.0cm	33.5~35.0cm	口縁部は直立し、端部を強く屈曲または外反させるのが多い。逆三角形通孔は上辺に対して斜辺が長い。	横矢羽	6	30(EK119), 33(FEI71), 34(FEI38), 35(FEN5), 36(FEI48)
AIE	20.5~23.5cm	18.5~19.5cm	36.0cm前後	口縁部が著しく長く、端部は粘土紐の貼付けによって肥厚。	筆記剤	1	38(EK117), 39(FWV18)
Allb1	9.0~10.5cm	17.0~18.0cm	32.5~33.5cm	口縁部はわずかに外反し、端部を小さく曲がせるのが多い。締じて筒壁が薄く、突起物も離手などの形がある。	筆記剣	5	103(EK118), 104(FEI136), 106(EK117), 107(EK116), 110(EK117), 114(EK120), 115(EK116), 116(EK117), 144(FE144), 171(WV18) 大型品
Allb2	9.0~10.5cm	17.0~17.5cm	32.5~33.0cm	底部に穴口に小孔を穿つ。口縁部はわずかに外開き、または外反する。	横矢羽	8	117(WK116), 118(WK118), 119(WK129), 120(EK126), 121(EK116), 122(BSE122), 123(FE122), 舞子浜第7次2号棺 130(FEI125), 131(FEI127)
Allc1	13.0~14.0cm	17.5cm前後	34.0~34.5cm	底部上寄りに小孔を穿つ。口縁部はわずかに外反し、外側にはヨコ方向の筋模様が目立つ。	—	—	126(FE128), 165(EK115) ※この2種類は調整手法やハケの一致から同工品と判断できる。
Allc2	12.0cm前後	17.5cm前後	32.5~33.0cm	外表面タテ・ナナメタケののちストロークの長いヨコハケを施す。	—	—	188(FEI64), 189(FEI28), 190(BWE11), 舞子浜第3次2号棺
AIV(F)		17.5cm前後	34.5~35.0cm	4個体制、上部が不明である1個部を除く3個体が朝顔形埴輪。舞子浜第8次2号北棺には肩部に羽状文。	矢印	1	191(FE144), 192(FEI46), 193(BWE2), 194(NEマウンド埴輪1)
Bld	14.5~17.0cm	17.5~19.5cm	33.5~36.0cm	口縁部は矮く、端部を大きく折り返す。突奇頭鑿定技術は強いヨコナギが目立つ。	3本滑繩	1	224(FE110), 225(FE110), 226(FE105), 227(FE110), 228(FE111), 229(FE113), 230(FE110), 231(EK127), 222(K125), 233(FE110), 234(WK128), EK116
CIL	6.5~9.0cm	17.5~18.5cm	34.5~36.0cm	締じて器壁が厚く、突起の幅も太い。ハケメバターンの共存者が目立つ。	—	—	240(EK110), 舞子浜第8次2号南棺 ※この2種類は溝落手法やハケの一致から同工品と判断できる。
DIL	8.0cm前後	18.0cm前後	35.5~36.0cm	器壁が矮く、内部の幅も太い。外側にはほぼ直方角のタテハケ、内部はヨコ方向のユビナギ。	山形	1	

表6-1 円筒埴輪細別表

大きく異なるのである。それには、より細かな工人の癖や手法、或いは製作工具の痕跡であるハケメの異同等にも着目して分析を深める必要がある。ここでは上記の細別単位のうちいくつかを取り出して検討してみることにしよう。

まずA II b1類を取り上げる。この類型は総じて器壁が薄く、突帯もシャープであることから、全形が判明せずとも他との識別が比較的容易で、全体的に均質的な印象を強く受ける。しかしながら、口縁端部や突帯、透孔の形状にはわずかに差異も認められる。例えば、WくIII28やFE III 4では器壁が他よりも若干厚く、突帯の突出も1.4cm前後とやや高い。さらに三角形透孔は各辺が直線的になる傾向が認められる。これに対して、EくIII17・18では突帯の上稜が鋭く摘み出される傾向があり突出も1.2cm前後とやや低い。また三角形透孔は左右2辺がやや湾曲する点に特徴がある。さらにFE II 126では、突帯は断面M字形で突出は1.0cm前後とさらに低く、外面のタテハケは段間の中央で明確に単位が変化する点で他とは異なる。口縁部の形状に関しては、WくIII28では屈曲が弱く端部が丸みを帯びるのに対して、逆にFE II 126は屈曲が強く端部の稜が鋭い、といったように細かい点で相異が認められる。したがって、一見すると非常に均質的見えるA II b1類についても、少なくとも①WくIII28、FE III 4、②EくII17・18、③FE II 126といった3人の工人がその製作に携わっていた状況が見て取れる。資料の残存状況により十分に分析できていない個体が含まれるため、実際にA II b1類の製作に携わった工人数はこれよりも若干の増加が見込まれる。

次にA II b2類を取り上げよう。この類型は、口縁部高こそA II b1類と大きな相異がないが、底部のやや上寄りに径3cm前後の小孔を穿つ点がA II b1類とは大きく異なる。WくIII16・18・29ではその小孔を穿つ際にいずれも向かって左側に明確な切り合いが生じている。この3個体については、3段目よりも上部への顔料の塗布が顕著で、顔料塗布に伴うヨコ方向の擦痕までもが明瞭に残る。また口縁部の形状がやや外開きながらほぼ直線的に立ち上がる点、「横矢羽」のヘラ記号を極細の工具で刻む点でも共通する。したがって、この3個体は同工品である可能性が極めて高い。一方、EくIII26は全形が判明するわけではないが、口縁部は外方への開きがほとんど認められず端部を玉縁状におさめる点、顔料の塗布も明確ではなく、やや太めの工具で「横矢羽」のヘラ記号を刻む点で上記の3個体とは明らかに特徴を異にする。また、EくIII6やFE III 2では口縁部の形状が上記4個体とは異なり緩やかに外反する。したがって、A II b2類についてもその製作には複数の工人が関与したことが明らかである。さらに舞子浜遺跡第7次調査2号埴輪棺にはA II b2類の朝顔形埴輪が使用されているが、突帯の形状や底部の小孔の穿ち方からやはり上記とは異なる工人による製品と判断できる。

この2類型の事例からも明らかのように、先述の口縁部高やヘラ記号等の共通性によって抽出できた細別単位とは、数人の工人からなる小グループとでもいうべき実体を捉えたものであったといえる。ここでは紙幅の都合上、説明を割愛するが他の類型についても、それぞれ細部の癖や手法によってある程度工人差を識別することができる。そこで次に視点を変えて上記のような理解をハケメ工具のあり方からも検討してみよう。

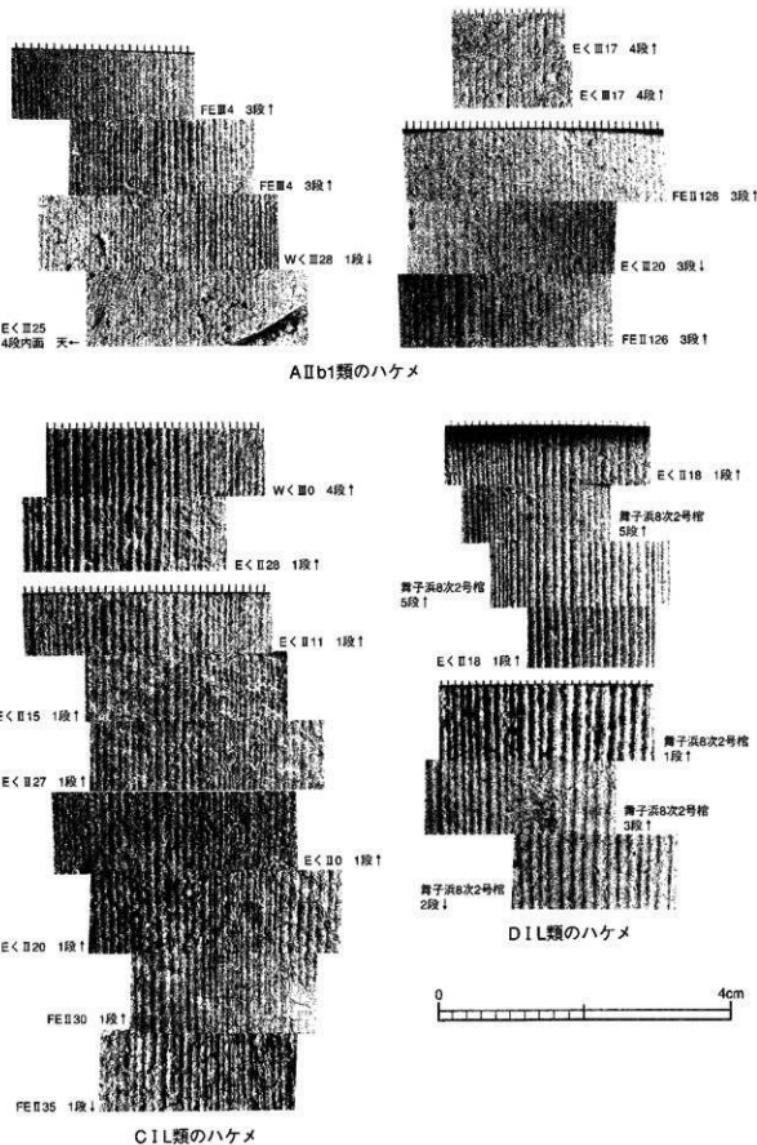
ここでも、まずA II b1類の器面に残されているハケメを取り上げる。残念ながら摩滅によって検討ができない個体も存在するが、少なくともA II b1類の製作には3種の異なるハケメ工具が用いられていることが明らかとなった(図6-2上)^{註1)}。このハケメ工具の違い

と上述の手法や癖に基づいて見出した工人差との関係についてみてみると、同工品と判断したWくⅢ28、FEⅢ4ではともに同一のハケメが残されており、一方それらとは異なる工人による製品と理解したEくⅢ17やFEⅡ126ではそれぞれ異なる工具が使用されていることがわかる。すなわち、AⅡb1類では概ね先に抽出した工人差とハケメ工具の異同とが対応している可能性が高く、この点からもAⅡb1類の製作には複数の工人が携わっていることが傍証される。ただし現状では、手法や癖が判明するものであってもハケメの残存が良くないものや、逆にハケメが判明するものでながら手法や癖が明確にできないものが多く、これ以上ハケメの異同に基づいてAⅡb1類の工人編成の実体に迫ることは困難である。

一方、CIL類におけるハケメのあり方はAⅡb1類とは異なる。CIL類は大型品であるため縁部高には大きな差異がなく、またその他に目立った基準も見出せなかつたので細分は行っていない。復元された13個体中において同工品と判断できたのはEくⅡ28とWくⅢ0の2個体1組のみである。最下段の半円形透孔、胴部の円形透孔は他の個体よりも大きめに穿つ点に特徴があり、突帯の形状や調整手法に加えハケメも一致する。一方、残りの11個体では個体間の共通性が乏しく、現状では明確な同工品を見出せていない。注目されるのは、そうした状況にも関わらず5個体(FEⅡ30・35、EくⅡ0・20・27)において同一のハケメが確認できた点である。さらに胴部の透孔の形状こそ判明しないがEくⅡ11・15の2個体も同一のハケメを残す(図6-2左下)。このように異なる工人の製品間で同一のハケメが残される要因としては、①T人間での工具の貸借、②同一の原材から取り出された兄弟原体が存在する、という2通りの可能性が考えられるが、この7個体の場合、同工品とは考え難い多くの個体間で同一のハケメが共有されていること、一部のハケメには断面形にわずかな相異も認められることから、兄弟原体が存在した蓋然性の方が高いと考える。ただし、EくⅡ0の場合、2段目より上の段では異なるハケメが残されている。このハケメの変化に対応して、突帯間隔設定技法が凹線からヨコナデに変化していることから、同一個体内で製作者が入れ替わる場合があったことも十分想定しておく必要がある。

いずれにしても、こうしたあり方はCIL類の製作に携わった工人相互がひとつのグループとして非常に密接な関係にあったことを示している。上述のようにAⅡb1類では3種のハケメ工具の存在を確認できたが、それらも断面の隆起がそれほど明確でなく全体としてパターンが密である点は原材レベルでの3種のハケメ工具の近さを示唆する。このように、個々の埴輪の癖や手法の異同に加えてハケメ工具のあり方に着目することで、五色塚古墳の埴輪生産組織には数人の工人からなる小グループがいくつも存在したこと、さらにはこうした小グループ内では工人相互が非常に密接な関係にあった状況が読み取れた。こうした小グループ(細別単位)こそが製作時における最も基礎的な編成単位であったと理解できる。

細別単位の実体をこのように理解してくると、先に透孔配置の共通性に基づいて設定した大別単位についてはそれよりも上位の編成単位を示している可能性が考えられることになる。ただし、細別単位と大別単位との製作時の関係性は、今のところ透孔の共通性以外には見出せていない。しかしながら、墳丘への配列に際しては、細別単位よりも大別単位を一定のまとまりとして配置場所が集まる傾向が認められる。例えば東西のくびれ部1段目平坦面ではAⅡ類が、前方部東側ではAⅠ類が比較的まとまって配列されており、その際には異なる細別単位の埴輪が隣り合って配列されている場合も少なくない。こうした



あり方は、製作時から焼成、配列に至る過程において透孔配置を共有する細別単位相互が近しい関係にあったこと、言い換えれば細別単位の次の大きなまとまりとして大別単位が機能していたことを示唆するものである。

さらに、全体はそうした細別・大別の単位を超えて、底部高・突帯間隔（各段の割付方式）や鰐の接合位置等を共有している点が重要となる。地域を越えた齊一性ばかりが強調される鰐付円筒埴輪であるが、五色塚古墳の突帯間隔17.5cm、底部高35cm前後という規格は後述する周辺古墳を除くと近畿中部でも今のところ他に類例がない。したがって、五色塚古墳の埴輪生産に携わった集団は相当数の工人を抱えながらも全体としていわば固有のデザインを共有していたと理解できる。逆に言えば、そうした規格やデザインの統制を実現していたのが、細別・大別単位として捉えることができた非常に組織的な工人編成であったと言うことができよう。

ところで、筆者は先に大阪府池田茶臼山古墳（前期中葉）や山口県柳井茶臼山古墳Ⅱ群（中期初頭）でも、ハケメ工具のあり方を踏まえて埴輪生産組織の復元的検討に取り組んでいる。この2つの事例では、両者とも組織の規模は非常に小規模でよくまとまっており、かつ工人相互はハケメが共有されるほど密接な関係にあった状況が明らかになっている（廣瀬2003a, b）。すなわち、池田茶臼山古墳や柳井茶臼山古墳Ⅱ群の埴輪生産組織は、ちょうど五色塚古墳における小グループ（細別単位）1つ程度の規模に相当することになる。むしろ、当該期の中小古墳の場合、こうした小規模な組織によって埴輪が生産されているのが一般的なので、こうした状況と比較することによって五色塚古墳の埴輪生産組織がいかに大規模であったかを実感することができる。

3. 周辺古墳出土埴輪との関係

五色塚古墳の周辺には類似した埴輪を出土する古墳（遺跡）がいくつか存在する。

五色塚古墳に隣接する小壺古墳は直径67mの円墳で、第5章に14個体ほど出土埴輪の実測図が掲載されている。いずれも底部のみの資料で1条目突帯まで残存するものがなく、最も残りの良いものから底部高は30cm以上あることが判明し、底部径も五色塚古墳のものと大きな相違がない。底部の半円形透孔が確認できるものがあることに加え、五色塚古墳出土埴輪の一部に見られる乱雑な円形のヘラ書きをもつものが1個体ある。資料的制約から細部まで踏み込んだ検討はできないが、断片的ながら五色塚古墳出土埴輪との共通性が確認できる。

歌敷山東・西古墳は五色塚古墳の西約500mにかつて存在した円墳で、前者が直径約30m、後者が約20mを測る。両者とも現在は完全に消滅しており、埴輪の詳しい情報も得ることができないが、梅原末治による昭和初期の調査報告には東古墳から出土した鰐付円筒埴輪および蓋形埴輪の略測図が掲載されている（梅原1931）。それによると底部1個体は底部径33cm前後、底部高36cm前後と五色塚古墳出土埴輪と法量を同じくする^[註2]。またともに掲載されたII縁部は、鰐上端を最上段突帯に接合する状況が明確に図化されている。6cm前後と短い口縁部高とその形状から、五色塚古墳の大型品のII縁部の特徴をよく備えることがわかる。また蓋形埴輪は中央と先端に突帯を有する無文の笠部が出土しており、五色塚古墳の蓋形埴輪と完全に特徴を同じくする。西古墳の埴輪についても、梅原の報告文によって東古墳とほぼ様相を同じくする点が窺える。

舞子浜遺跡は五色塚古墳から西約1kmに位置する埴輪棺墓群で、これまでに検出された埴輪棺墓は19基に及ぶ（神戸市教委1996・97、兵庫県教委2005）。用いられた埴輪には、今のところ五色塚古墳では明確に捉えられていない盾形埴輪および頂部が「ついたて」状を呈する埴輪が含まれる。しかしながら、その他の大半の円筒埴輪と蓋形埴輪は五色塚古墳の埴輪と特徴が一致する。円筒埴輪は少なくとも、五色塚古墳大別分類のA I、A II、B I、D I類が確認でき、細別単位レベルでの同一性を指摘できるものもある。その中で、第8次調査出土2号南棺に用いられた鰐付朝顔形埴輪はD I L類に該当するもので、底部・胴部の透孔や突帯の形状が五色塚古墳出土のD I L類の普通円筒埴輪EくII 18に酷似する。さらに両者は、外面は段間をほぼ垂直方向のタテハケによって1ストロークで埋める点、内面はユビナデによるヨコ方向の細かい単位を明瞭に残す点、突帯間隔設定技法にはタテ0.6cm、ヨコ0.8cmの浅い方形刺突を施す点で共通する。加えて両者は同一のハケメの使用も確認できた（図6-2右中央）^(注4)。よってこの2個体に関しては同工品と判断して間違いない、それと同時に同一の工人が朝顔形埴輪と普通円筒埴輪の両者の製作にあたることがあったことも判明する^(注4)。

このように、舞子浜遺跡出土埴輪に関しては從来から五色塚古墳との類似性が指摘されてきたところであるが、五色塚古墳出土埴輪の整理が進んだ結果、具体的に両遺跡間で細別単位レベルでの埴輪の同一性が確認できるようになり、さらには同一工人による製品をも抽出することができた。舞子浜遺跡出土埴輪については五色塚古墳の埴輪生産を担った集団から供給されたことが確実になったと言える。細部での検討が困難な小壺古墳や歌敷山東・西古墳の埴輪についても、断片的ながら特徴の共有が見えることから五色塚古墳と同一の集団から供給されたものであるとみて間違いかろう。したがって高橋克壽が中期中葉の大王墳とその陪塚との間に見出した「一元的供給」（高橋1994）という現象はこの段階にまで遡る可能性が高い^(注5)。しかしながら、その後この地域で五色塚古墳の特徴を引き継ぐ埴輪が定着した形跡ではなく、五色塚古墳を契機として結成された埴輪生産組織は短期間で解体したと考えられる。

ところで、明石市魚住町清水に所在する幣塚古墳は直径35m程の円墳であるが、ここからも五色塚古墳のものに類似する埴輪が出土している（明石市立文化博物館1995）。埴丘裾を巡る埴輪列が検出されており、樹立間隔は約2mと広い。取り上げられた20本近くの埴輪は1段目がかろうじて残存する程度だが、いずれの個体にも鰐の破片が伴って出土している。突帯間隔が判明するものはないが、底部高は34cmを測るもののが2個体、37.5cmを測るもののが1個体ある。前述したように当該期の鰐付円筒埴輪の底部高で30cm代半ばを測るものは五色塚古墳を除くと類例がない。口縁部高が判明するのは1点のみであるが12.5cmを測るものがあり、五色塚古墳の小型品の中にみられる規格に相当する。したがって五色塚古墳と同一の集団から供給された可能性が十分考えられるが、問題は幣塚古墳の位置が舞子浜遺跡からさらに西へ約15kmも離れている点である。

これまでの通説的理理解に従えば、こうした古墳時代前期における埴輪の遠距離供給を認めることには躊躇を覚えざるを得ないだろう。しかしながら、そもそも直径35mほどの円墳に対して鰐付円筒埴輪のみからなる配列がなされている点は当該期としては破格の扱いとも言える。その一方で、埴丘裾の樹立間隔は2mと非常に広く、全体の樹立本数、言い換えれば製作本数がそう多くは見込めない点がいさか不可解となる。こうした状況に対

しては、幣塚古墳の築造に際して個別に小規模な生産がなされたとするよりは、五色塚古墳周辺から限定的な数量の埴輪の供給を受けた結果と見るほうが理解しやすい^(註6)。取り上げられた20本近くの埴輪の中で相互に特徴が酷似するものがほとんど見出せない点もそうした理解に合理的であるし、明石海峡を越え潮流にのって埴輪が運搬されたことも想像に難くない。八尾市萱振1号墳（一辺27mの方墳）は小古墳でありながら、精巧な器財埴輪とともに鰐付円筒埴輪が集中的に配列された事例として著名であるが（広瀬編1992）、ここでも鰐付円筒埴輪の樹立間隔は心々で1.2～1.5m程度であり、密な配列は達成できていない。現状では推測の域を出ない議論であり、今後、胎土分析等も踏まえた詳細な検証が必要となることは言うまでもないが、こうした当該期の精巧な埴輪を有する中小古墳については、拠点的な生産地から埴輪がもたらされている可能性も考えておく必要があろう。その当否次第では、埴輪の遠距離供給も部分的には前期後葉の段階まで遡り得ることを指摘しておきたい。

4. II群鰐付円筒埴輪の型式組列

五色塚古墳の円筒埴輪を川西宏幸による從来の編年觀に照らし合わせれば、いわゆるII期（川西1978）の埴輪に該当することになる。しかしながら、一段中の透孔数や外側調整のあり方が主な指標となる川西の枠組みでは、前期古墳の埴輪の型式的特徴を十分捉えきれなくなっている。全形の判明する資料が増加した今日的な資料の実態からすれば、川西がかつてII群（期）として捉えた内容は、高橋克壽の言う「齊一的な鰐付円筒埴輪」（高橋1994）を中心とする前期後葉から中期初頭にかけての埴輪様式を断片的に捉えたものであったと言える。当該期の埴輪様式の再評価については別稿を用意しているので詳細はそれに譲ることにするが、ここではひとまずII群の埴輪を「齊一的な鰐付円筒埴輪」を中心とする埴輪群の内容に置き換えた上で、五色塚古墳出土埴輪の編年的位置づけを行いうにあたって重要なII群鰐付円筒埴輪の型式変化の過程を再検討しておくことにしたい。

まず、II群鰐付円筒埴輪の特徴をあらためて整理しておくと、①胴部の透孔は原則として1段2孔で、底部にも半円形を中心とする透孔が配置される場合が多い、②鰐は下端を一条目突帯に上端を口縁端部に合わせて接合することを基本とする、③底部高は突帯間隔よりも高く、逆に口縁部高は突帯間隔よりも短く割り付けられる（朝顔形埴輪の場合、最上段が短く割り付けられる）ことを原則とする、④同一古墳内においても段数・器高の異なる大小の鰐付円筒埴輪が存在する、といった点があげられる。こうした特徴は鰐をもたない通常の円筒埴輪にも見出されることがあり、言い換えればこの種の鰐付円筒埴輪こそが当該期の円筒埴輪の特徴を大きく規定していたと理解できる。加えて、この種の埴輪には古墳を超えた高い規格性がしばしば見出されてきており、そのことが「齊一的」と評価される大きな理由の一つとなってきた。

ところで、今回の五色塚古墳の報告では豊富な数量的裏づけによって、大型品が製作グループの差異を超えて口縁部高を短く規格化していたのに対し、小型品の口縁部高は小グループごとに大きく異なる点が明らかとなった。特に小型品では口縁部高を突帯間隔よりも短く割り付けるという上記の原則すら放棄しているものが含まれる。こうしたあり方は他古墳でも認められるようであり、鰐付円筒埴輪であっても小型品の口縁部高の扱いには十分な注意が必要である。すなわち、これまで一律に規格性の高さが評価されてきた鰐付

円筒埴輪であるが、厳密に規格が管理され全体の製作の中でもより上位に置かれていたのは大型品の鰐付円筒埴輪であったと理解できる。したがって、鰐付円筒埴輪の型式組列を検討するにあたっては、大型品の鰐付円筒埴輪を基軸に据えるべきと考える。

その上でまず組上に上げなければならないのが、円筒埴輪各段の割付方式の差異に着目した近年の鐘方正樹の分類法および編年観である（鐘方2003）。鐘方は、前期古墳の円筒埴輪に対して、底部高と突帯間隔を等しく揃える割付1式、底部高を口縁部高と突帯間隔の和で割り付ける割付2式、口縁部高を突帯間隔もしくは底部高の $1/2$ で割り付ける割付3式という3種の異なる割付方式を見いだした。鐘方は、おおむね1式から3式への変遷を想定しており、前期後葉（いわゆるII期）の埴輪を新古に二分する際には割付2式から3式への移行が日安になるとする。鐘方は五色塚古墳出土埴輪を割付3式（口縁部高を突帯間隔の $1/2$ で割り付ける）に該当させ、II期の中でも新しく位置づけた。

こうした鐘方の分類法は、円筒埴輪の口縁部・胴部・底部の割付に一定の関係性が存在することを明らかにした点で画期的であり、前期から中期への円筒埴輪の変化を理解する上でも重要な視点となる。しかしながら、問題がないわけではない。とりわけ最大の問題点は、割付方式の認定において1・2式では底部高のあり方を基準としながら、3式では認定基準が口縁部高に置き換えられる点にある。そのため、実践的な分類では同一個体であっても異なる割付方式にまたがる事例が生じることになる。また、口縁部高には一定の変異があるにもかかわらず底部高は全体を通して規格化されるという五色塚古墳のような事例を十分評価できなくなる。先の鐘方の五色塚古墳例に対する評価は一部の口縁部高を拡大解釈した結果であり、妥当なものではない。

ここでは鐘方の分類法を踏襲しつつも、以上の問題点を踏まえて、II群鰐付円筒埴輪の大型品を以下のように型式分類することにする（図6-3）。すなわち、第一義的な分類基準を底部高が突帯間隔・口縁部高とどのような関係にあるかに絞る。したがって、鐘方が割付3式として採用した二つの指標のうち口縁部高 = $1/2 \times$ 突帯間隔という基準は除外している。なお、大型品とは5条6段以上のものを指し、小型品は4条5段以下とする。

まず、IIA型式は底部高が突帯間隔のほぼ2倍となるもので、鐘方が口縁部高を根拠に割付3式にあてた埴輪群の大半はこの型式に該当することになる。IIB型式の著しく高い底部高は高橋が指摘したように、当初存在した本来の1条目突帯が省略された結果、生じた形態と考える。高橋がその根拠とした奈良市マエ塚古墳（図6-3左）には鰐下端の接合位置よりも下部にもう一条の突帯が残る（高橋1992）。IIB型式には、そうした本来の1条目突帯を残すものが一定量含まれる。高橋は前期後葉の「齊一的な鰐付円筒埴輪」と、それ以前のいわゆるI期の円筒埴輪との型式的な不連続性を強調する。しかしながら、I期の円筒埴輪に底部高と突帯間隔が揃うものが見出される点は、むしろIIB型式をII期の円筒埴輪の中でも型式的に古く位置づける際の根拠とすことができよう。

IIA型式に統いて出現したと考えるのがIIB型式である。口縁部高は突帯間隔の $1/2$ 前後のものが多く、底部高はIIB型式よりも縮小し口縁部高と突帯間隔の和にはほぼ等しくなる。すなわちIIB型式は鐘方の割付2式にはそのまま対応するものであるが、その編年的位置づけについては後述のように鐘方と理解が異なる。最も定型化した鰐付円筒埴輪の型式と言え、多くの古墳で見出されることから一定期間、安定して生産が継続したものと推察される。

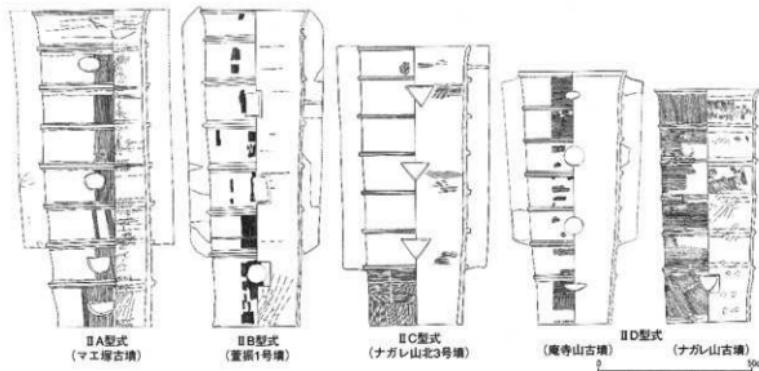


図6-3 II群鰐付円筒埴輪の諸型式

II C型式ではII B型式よりもさらに底部高の縮小が進む。しかしながら、依然として底部高く突帯間隔<口縁部高というII期の円筒埴輪の基本形態が維持されている。かつ底部高は口縁部高のほぼ2倍で割り付けられる傾向が顕著であり、その点は鐘方が割付3式の指標の一つに掲げた点である。すなわち、鐘方が割付3式としたものの中から口縁部高 = $1/2 \times$ 突帯間隔という基準を除外して残った埴輪群がこの型式に該当することになる。

II D型式は底部高がさらに縮小し、突帯間隔をわずかに上回るか或いはほぼ等しいものであり、口縁部高も突帯間隔とはほぼ同じ値となるものである。II期の埴輪の最終末のあり方を示すものとして設定したもので、口縁部高が低く底部高の高い典型的なII期の円筒埴輪からは型式学的に最も乖離した型式である。鰐下端の接合位置がずれるもの、鰐自体を接合しないものが多くなる。

以上のようにII群鰐付円筒埴輪の大型品はII A型式→II D型式の方向で型式変化をとげたと考える。これは概ねI期的な円筒埴輪の特色を払拭して定型化したII群鰐付円筒埴輪が、しだいにIII期の形態へと移行していく流れとして理解できる。しかしながら、この変遷観をめぐっては、特にII A型式とII B型式の先後関係において前述の鐘方の編年觀と齟齬をきたすことになる。

すなわち、鐘方はここでいうII B型式(割付2式)をII期の中でも最も古く位置づけており、さらにI期新相の埴輪の中に割付2式に相当する埴輪が見出されることから、両者の連續性を読み取っている(鐘方2005)。たしかにI期において割付2式に該当する円筒埴輪が存在するのも事実であるが、それは高さ3cm前後の極狭口縁と呼ばれる口縁部をもつものに多く見出される(注7)。一方でI期の埴輪にはそれ以外にも、鐘方が割付1式とよぶ底部高と突帯間隔がほぼ等しく割り付けられるものも存在する。よって鐘方の理解ではその両者との関係が十分説明できない点に弱点がある。

またII B型式は、一般的に口縁部高が突帯間隔の1/2前後にまで伸張しているが、I期の極狭口縁の口縁部高(3cm前後)との差異があまりにも大きい。底部高=口縁部高+突帯間隔(割付2式)という関係は同じであっても、口縁部高3cm前後の極狭口縁の埴輪では結果的に底部高と突帯間隔にそれほど差が生じない。したがって、そこから直接的に

II期の埴輪へのつながりを想定した場合、どうしてもII期の埴輪の底部高が突帯間隔を大きく上回る点が説明できないのである。前述したように、II期の底部高が著しく伸張する要因は、鰐下端が接合される突帯と底部下端との間に存在した本来の1条目突帯が省略されることに求めるのが妥当であろう。そのように考える限り、底部高が突帯間隔のほぼ2倍となるIIA型式こそが最も古い型式と理解し得る。

口縁部高に関しても、IIA型式が主体となる奈良市マエ塚古墳（小島1969、中井1976、今尾1983）や木津町瓦谷1号墳（埴輪棺を含む、石井・有井1997）ではそれほど規格化されておらず、この点はI期の多様な口縁部のあり方をIIA型式がそのまま踏襲している可能性が考えられる。さらに両古墳ではII期部高3.5cmほどの極狭口縁そのものと言ってよいものや、一段中に3孔以上の透孔を配置する例が確認できることから、IIA型式の成立期にはI期的な埴輪およびその要素が一定量残存することが確実である。瓦谷1号墳からI期の円筒埴輪にしばしば見られる突帯を有する鰐の破片が数点出土していることも、IIA型式の他型式に対する相対的な古さを示している（図8）。

ただし、鐘方がI期新相に見出した割付2式とここでいうIIB型式とは完全に不連続であったとは考えない。むしろIIA型式成立期にはI期的な特徴を残した埴輪群が残存していることが確実視されることからも、新たに成立したIIA型式と一部残存していたI期的な埴輪とが統合されるかたちでIIB型式が成立したと理解する（図6-4）。そうした状況を示唆するのが瓦谷1号墳で埴輪棺に転用されていたI期の特徴を残した埴輪である（図6-4）。2・4段目にそれぞれ長方形透孔を3孔配置するとともに極狭口縁を採用しており、口縁部高と底部高の関係は鐘方のいう割付2式となる。同様の埴輪はもう1個体出土しており、瓦谷1号墳の墳裾で器財埴輪や典型的なIIA型式の鰐付円筒埴輪と組み合って出土していることから、同古墳でIIA型式の埴輪とともに用いられたものである可能性が極めて高い。注目すべきは、図6-4はI期的特徴を色濃く残すにもかかわらず、II期の鰐付円筒埴輪の特徴である底部の半円形透孔を有している点である。こうしたあり方は、前段階的な特徴を保持した埴輪工人が新相のIIA型式の埴輪工人と一定期間接触をもちながら、ともに埴輪生産に従事していた状況を物語る。割付2式となるIIB型式の埴輪はそうした過程を経て成立していった状況が推測される。

ところで五色塚古墳の鰐付円筒埴輪の特徴として看過できないものに、鰐上端の接合位置が通常よりも一段低く最上段の突帯に接合される点がある。II期の埴輪ではIIA型式のみにみられる特徴であり、瓦谷1号墳出土埴輪の一部や東大阪市えのき塚古墳（四條史編さん委員会1977）などに類例がある。実はこの点は、先行するI期段階の鰐付円筒埴輪においてもしばしば見られる特徴であり、天理市東殿塚古墳（松本編2000）、同西山古墳（竹谷・廣瀬2000）、同ノムギ古墳隣接地（岡林1997）など極狭口縁をとる鰐付円筒埴輪では必ずと言ってよいほど鰐の上端は最上段突帯に接合されている（図6-5）。IIA型式の一部にみる鰐上端の接合位置が通常よりも一段下がる特徴も、同型式がそうしたI期段階の鰐付円筒埴輪から継承したものである可能性が高い。

詳述してきたように五色塚古墳出土から出土した埴輪はいずれも底部高が突帯間隔のはば2倍で割り付けられており、IIA型式に該当することが間違いない。現在知られているIIA型式の中でも最も高い底部高35cm前後を測るが、これは通常のII期の埴輪よりも突帯間隔自体が17.5cm前後と広いためで、型式的な古さをそのまま示すものではない。

むしろ、口縁部高が比較的多様であるⅡA型式の中には大型品の口縁部高が7.5cmあるいは9.5cm前後に近く規格化されている点は、ⅡA型式の中でも新しく位置づけられる要素と言えよう。ⅡB型式の口縁部高は7~10cm前後を測るものが多いが、この点は五色塚古墳の埴輪がⅡB型式成立の直前段階に位置することを示唆する。すなわち、ⅡA型式内における口縁部高の規格化こそが、底部高を口縁部高と突帯間隔の和(割付2式)で規格化するⅡB型式成立のための条件であったと理解できる。

少々長くなつたが以上の理由からⅡA型式がⅡB型式よりも先行して出現したことはほぼ間違いないと考える。そしてⅡC型式→ⅡD型式へと底部高のさらなる縮小、各段が均一化する方向で連続的な型式変化が理解できる。こうした鰐付円筒埴輪の大型品の型式組列を基軸に据えることによって、Ⅱ期の円筒埴輪全体の変遷を捉えなおすことが出来ると考えている。しかしながら、実際には同一古墳から複数の型式が出土するのが一般的であり、さらに小型品や鰐付以外のものも含めて、その全体の組み合わせでもって時間差を把握する必要がある。それにはさらなる紙幅を要することになるので、ここではⅡA~ⅡDのそれぞれの型式の出現によってⅡ期が4段階程度に細分される可能性のみを述べておく。帶金式甲冑や蕨手刀子、滑石製農工具等の副葬開始をもって中期初頭とする近年の古墳編年観に従うならば、ⅡC型式出現以前が前期、ⅡC型式出現以後からが中期ということになるが、ⅡC型式出現以後も一定期間ⅡB型式は残存すると考える。

5. 五色塚古墳出土埴輪の年代と系譜

以上の検討により、ⅡA型式のみから構成される五色塚古墳の埴輪群は、Ⅱ期でも最も

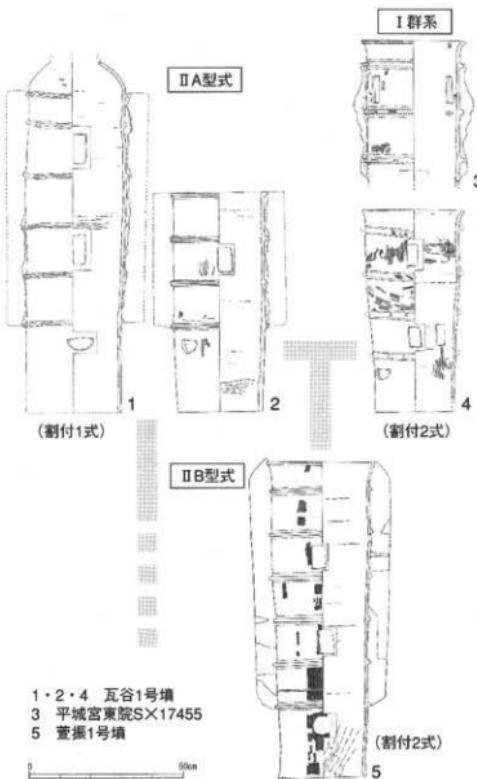


図6-4 ⅡB型式鰐付円筒埴輪の成立過程

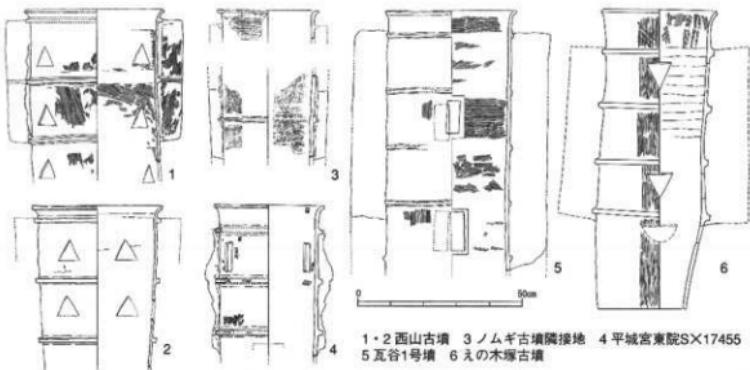


図6-5 最上段突帯に鰐上端を接合する埴輪

古い段階に位置づけられることになる。外提出土のE類は鰐を持たず底部高と突帯間隔を等しくするが、前述のようにE類の1条目突帯を省いた姿が墳丘出土のものに対応するため、これらも同様にII A型式の範疇として捉えられる。E類や鰐付円筒埴輪の1個体FW IV 3 (204)には透孔を一段中4ないし3孔配置するものが見られるが、300個体近くの埴輪においてその他にI期的な特徴は確認できない。大型品の口縁部高の規格化が進んでいる点からも、II A型式が主体となる時期の中でもマエ塚古墳や瓦谷1号墳よりはやや後出し、II B型式が主体となる萱振1号墳や上の山古墳(木下編1996)よりも若干先行するものと考える。前期後葉でも比較的古い段階に位置づけることが許されよう。

五色塚古墳出土埴輪の系譜を考える上でも、やはりII A型式が主体となるマエ塚古墳や瓦谷1号墳との関係が重要となる。墳丘規格の同一性が指摘される佐紀陵山古墳からは鰐付円筒埴輪の出土が確認されているが、型式比定が可能なものの出土は知られていない(土生田1980、福尾1986・93、福尾・徳田1992、宮内庁2003)。ただし、隣接するマエ塚古墳や瓦谷1号墳からは内容を等しくする器財埴輪が出土していることから、II A型式の埴輪が主体となっている可能性が極めて高い。前述のように瓦谷1号墳(8号埴輪棺)から出土した鰐付円筒埴輪には最上段の突帯に鰐上端を接合するものが含まれることからも(図6-5-5)、五色塚古墳の埴輪の内容はこうした奈良盆地北部の佐紀陵山古墳を中心とする埴輪生産に直接的な系譜が辿れるものと考える。

なお、東大阪市えの木塚古墳からは、突帯間隔や底部高は若干、下回るもの五色塚古墳の小型品と特徴を共有するII A型式の鰐付円筒埴輪が出土している。そのうちの1個体には「綾矢羽」とみられるヘラ記号が残存しており、前述のように鰐上端を最上段突帯に接合するなど、五色塚古墳との共通性が極めて高い(図6-5-6)。五色塚古墳の埴輪生産に携わった集団との何らかの関わりが推測される。

おわりに

以上のように、ここでは五色塚古墳の埴輪生産組織の実体や、それを踏まえた埴輪の編年や系譜上の位置づけについて検討を加えてきた。その結果、五色塚古墳の埴輪生産組織

は当該期の一般的な古墳と比べて格段に大規模であること、それにもかかわらず、全体の統制がよく行き届いており、極めて組織的な生産がなされていた状況を明らかにすることができた。これまで実体を十分つかむことができていなかった200m級の巨大古墳における埴輪生産組織像について、ひとつの具体的なモデルを提示することができたと考える。またその生産組織は五色塚古墳のみならず、当初から近隣の円墳4基および埴輪棺墓群へも埴輪を供給することを念頭に編成され、かつ短期間で解体した蓋然性が高まった。したがって、五色塚古墳の築造はそれ単独でなされたものではなく、近隣の中小首長墳の築造や埴輪棺墓群の形成とも連動して進行していったものと考えられる。

一方、五色塚古墳出土埴輪の年代は、前期後葉でも比較的古い時期に位置づけることができる。またその直接的な系譜は、奈良盆地北部の佐紀陵山古墳周辺の埴輪に求めることができる。五色塚古墳の墳丘形態は、かねてより佐紀陵山古墳同一設計によるものとの指摘がある（岸本1992）。墳丘・埴輪の両者において高い共通性が見出されることからも、五色塚古墳は当該期の大王墳と目される佐紀陵山古墳からの強い影響力を背景に築造されたものと理解できる。

ただし、ここでは十分論じ切れなかった部分も多い。とりわけ、生産組織の復元的検討においては、各細別単位の様相についてその一部を説明したに過ぎず、全体像の提示には至っていない。また編年的位置づけにあたっては、Ⅱ群鰐付円筒埴輪の型式組列を再検討することでその責務を果たしたと考えるが、前期後葉から中期初頭にかけての埴輪編年を再構築し、その様式構造を明確にするには、共伴する鰐付以外の円筒埴輪、器財埴輪のあり方も含めて総合的な検討を行う必要がある。これらの点については、それぞれの情報を十分整理した上で改めて詳論することにしたい。

謝辞

本稿を成すにあたっては、下記の諸氏・諸機関をはじめ多くの方々から資料見学の際のご配慮並びに有益なご教示を賜りました。末筆ながら記して感謝の意を表します。稻原昭嘉、篠宮正、筒井崇史、中西克宏、山下俊郎、吉村公男、明石市立文化博物館、河合町教育委員会、(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター、東大阪市立郷土博物館、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（敬称略・五十音順）

(註1) 通常、タテハケとして残されたハケメが逆目（反対）の状態で一致する場合、正逆でパターンが左右に偏る場合が多い。これは、タテハケに際しては一定の幅を有する工具の左右の一端のみが器面に触れるためであると理解できる。よってタテハケの場合、抽出できたハケメパターンの幅が狭い場合、パターンの不一致をもって即座に工具の違いと判断できる場合がある。しかし、今回、五色塚古墳で抽出できたハケメの多くは、逆目パターン間でも左右の偏りが大きくなる。逆目の関係を通して確認できるパターン全体の幅も3～5cm前後とさほど広くはないことから、五色塚古墳の埴輪生産で用いられたハケメの工具幅自体がさほど広いものではなかった可能性が高い。したがって、五色塚古墳の場合、3cm前後のパターンが把握できており、なおかつそのパターン内で逆目が確認できる場合は、パターンの相異をそのまま工具の違いとして理解できることになる。

(註2) 梅原報告第3図中のバースケールに忠実に従うと、あまりにも各埴輪の法量が大きすぎることになる。バースケールの10寸の付記はおそらく15寸の誤り（センチ単位では30cmが20cmの誤り）であろうと判断する。

- (註3) ただし、ハケメが一致するのはEくⅡ18各段と舞子浜8次2号棺4段目以上の部位においてであり、舞子浜8次2号棺1~3段目ではそれらとは異なるハケメが残されている(図6-2右下)。その間、各部位の形状や調整手法自体は全く変化していないことから、同一人が途中で工具を持ち替えた結果と判断できる。
- (註4) 同様に同一人が朝顔形埴輪と普通円筒埴輪の両者の製作にあつた状況は、五色塚古墳においてもAⅡc2類(FEⅢ8とEくⅢ5)において確認できる。
- (註5) 「定式化した」器財埴輪や鋪付円筒埴輪という表現がしばしば用いられるが、この種の埴輪も古墳や地域を越えると様相を異にする場合が多く、器財埴輪もこの段階では古墳ごとの型式的な変異が大きい。こうした中で、天理市渋谷向山古墳(笠野1974)と上ノ山古墳(木下編1996)の間でそれぞれ酷似した盾形埴輪片が出土している点は注目される。前期後葉から中期初頭にかけて、大正墳とそれに隣接する陪塚的な古墳との間では既に「一元的供給」が開始されていた可能性を示唆するものである。
- (註6) 前述の吹敷山西古墳でも埴丘壇の樹立間隔は1m前後と墳頂部に対して広かったことが指摘されており、同様に設定された本数の埴輪でもって埴丘全体の配列を試みた結果と推測できる。
- (註7) ただし、柏原市玉手山7号墳例(岸本他2004)や神戸市白水瓢箪古墳例(神戸市教委1996)のように、口縁部高の値とは無関係に底部高が突堤間隔を若干上回る事例も存在する。1期新相の底部高>突堤間隔となる円筒埴輪の全てが削付2式として理解できるわけではない点には注意を要する。
- (註8) ⅡB型式以降の埴輪にも若干、古い要素が残存する場合もあるが、ⅡA型式期ほど顕著ではない。

〈引用・参考文献〉

- 明石市立文化博物館 1995「精塚古墳」「発掘された明石の歴史展」
- 石井清司・有井広幸編 1997「瓦谷古墳群」京都府遺跡調査報告書第23冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 大木 努 1995「下総型埴輪基礎考」「埴輪研究会誌」第1号
2002「円筒埴輪という装置」「東アジアと日本の考古学」Ⅱ 葛製② 雄山閣出版
2005「下総型埴輪再論」「埴輪研究会誌」第9号
- 今尾文昭 1983「マエ塚古墳」「大和考古資料目録」第11集 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 梅原末治 1921「垂水歌敷山古墳の調査」「兵庫県史跡名勝記念物調査報告」第8號 兵庫県
- 岡林孝作 1997「大和古墳群(ノムギ古墳隣接地)発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報」(第一分冊)1996年度 奈良県立橿原考古学研究所
- 置田雅昭 1977「初期の朝顔形埴輪」「考古学雑誌」第63号第3号
- 笠野 紋 1974「景行天皇陵山辺上陵の出土品」「冉陵部紀要」第26号
- 鐘方正樹 1997a「前期古墳の埴輪」「堅田直先生古稀記念論文集」
1997b「中期古墳の埴輪」「史跡大安寺旧境内Ⅰ」奈良市教育委員会
2003「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」「埴輪論叢」第4号
- 2004「玉手山古墳群の研究成果と諸問題」「玉手山古墳群の研究」・総括編 柏原市教育委員会
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第64卷2号「古墳時代政治史序説」 塙書房1988に改定所取)
- 川村和子 1997「5世紀代の蓋形埴輪の変遷」「西藤山古墳」藤井寺市文化財調査報告16集 藤井寺市教育委員会
- 岸本直文 1992「前方後円墳築造規格の系譜」「考古学研究」第39卷第2号
- 岸本直文他 2004「玉手山7号墳の研究」大阪市立大学考古学研究報告 第1冊 大阪市立大学日本史研究室
- 木下豆編 1996「上の山古墳」「中山大塚古墳 附篇 葛木介大塚古墳 上の山古墳」奈良県立橿原考古学研究所

調査報告書第82冊

- 京都大学文学部 1968『京都大学文学部博物館考古資料目録』第2部 日本歴史時代
宮内庁書陵部 2003『出土品展示目録 墓輪IV』
神戸市教育委員会 1982『史跡五色塚古墳復元・整備事業概要』
1996「舞子浜遺跡第5次調査」「平成5年度埋蔵文化財調査年報」
1996「舞子浜遺跡第7次調査」「平成5年度埋蔵文化財調査年報」
1996「舞子浜遺跡第8次調査」「平成5年度埋蔵文化財調査年報」
1996「白水瓢塚古墳」「平成5年度埋蔵文化財調査年報」
1997「舞子浜遺跡第9次調査」「平成6年度埋蔵文化財調査年報」
小島俊次 1969『マエ塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第24冊
四條史編さん委員会 1977『猪ノ木古墳』『河内四條史』第2冊 史料編 I
篠吉正・小川弦太編 2005『舞子浜遺跡－県立舞子公園整備工事に伴う発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第279冊 兵庫県教育委員会
城倉正祥 2005a『同工品分析による埴輪生産組織の復元』『埴輪研究会誌』第9号
2005b『円筒埴輪の多様性』『古代文化』第57巻第10号
清野孝之 1997『埴輪棺(SX17455)の調査』『奈良国立文化財研究所年報』1997-Ⅲ
高橋克壽 1988『器財埴輪の編年と古墳祭祀』『史林』第71巻第2号
1992a『壹振1号墳の埴輪とその意義』『壹振遺跡』大阪府文化財調査報告第39輯
1992b『器財埴輪』『古墳時代の研究』第9巻 雄山閣
1994『埴輪生産の展開』『考古学研究』第41巻第2号
竹谷俊夫・廣瀬覚 2000『天理西山古墳出土の埴輪棺蓋について』『天理参考館報』第13号
辻川哲朗 1998『円筒埴輪実袋設定技法の復元－埴輪受容形態検討の基礎作業として－』『埴輪論叢』第1号
埴輪検討会
2003『突帯－突帯間隔設定技法を中心として－』『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
中井一夫 1976『マエ塚古墳外堤』『奈良県古墳発掘調査集報 I』奈良県文化財調査報告書第28集
土生田純之 1980『狭木之寺間陵外堤人止柵改修工事箇所の調査』『青陵部紀要』第32号
廣瀬 覚 2002『前・中期古墳の埴輪配列』『季刊考古学』第79号
2003a『柳井茶臼山古墳の埴輪とその生産組織』『立命館大学考古学論集』Ⅲ
2003b『埴輪の伝播と工入論』『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
2003c『摂津猪名川流域における前期古墳の埴輪とその系譜』『古代文化』第55巻第9号
広瀬雅信編 1992『壹振遺跡』大阪府文化財調査報告第39輯 大阪府教育委員会
福尾正彦 1986『狭木之寺間陵整備工事区域の調査』『青陵部紀要』第38号
福尾正彦 1993『狭木之寺間陵整備工事にともなう立会調査』『青陵部紀要』第44号
福尾正彦・徳田誠志 1992『狭木之寺間陵整備工事区域の調査』『青陵部紀要』第43号
松木武彦 1990『蓋形埴輪の変遷と画期－畿内を中心に－』『鳥居前古墳 総括編』大阪大学文学部考古学研究報告第1冊
1992『吉備の蓋形埴輪－器財埴輪の地域性に関する考察』『古代吉備』第16集
松本洋明編 2000『西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告書第7集
柳井市教育委員会編 1999『史跡柳井茶臼山古墳－保存整備事業発掘調査報告書－』
吉村公男 1992『ナガレ山古墳発掘調査概要』『大和・河内・和泉・摂津の古墳編年』大和古中近研究会